連載コラム

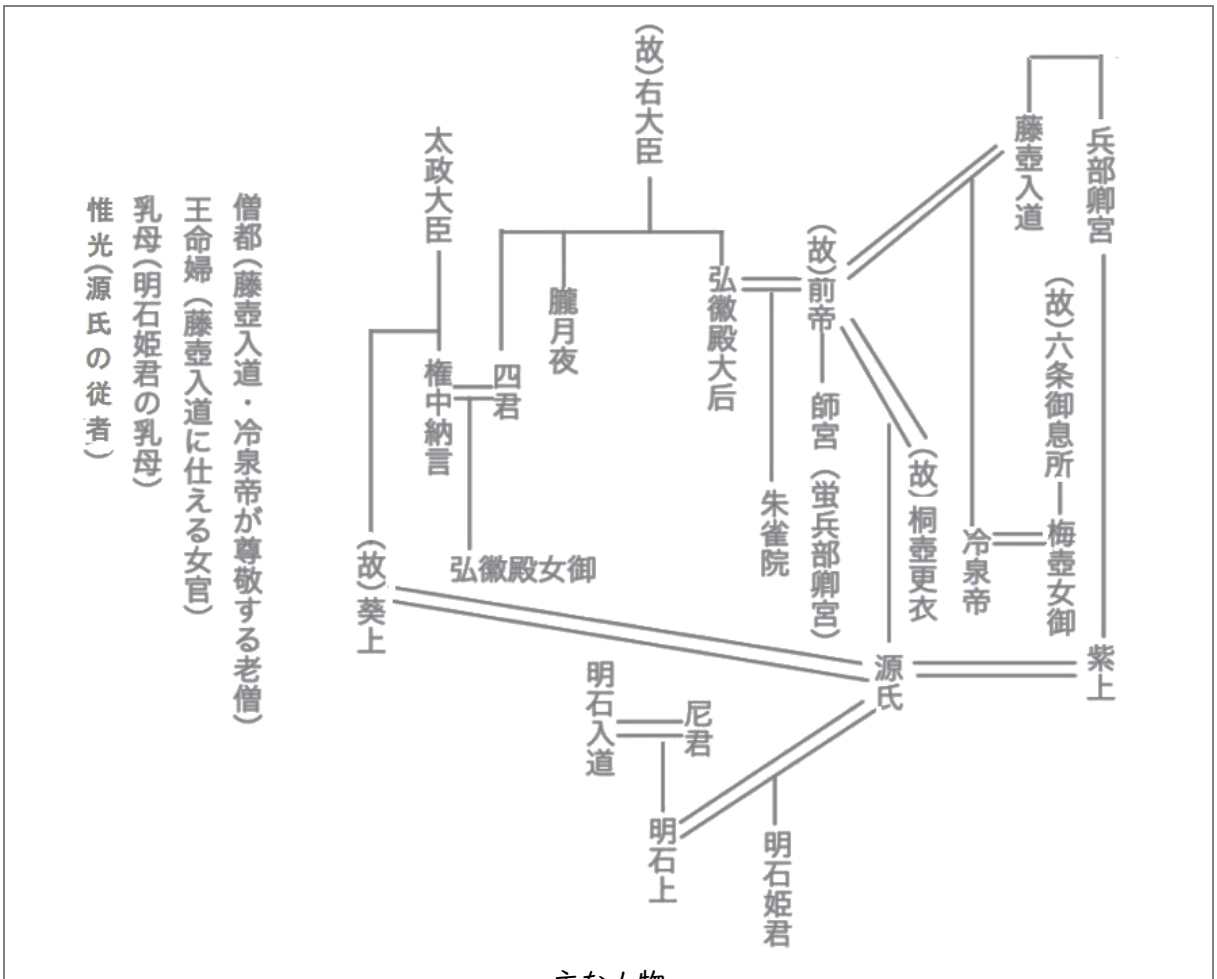
みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第 80 回

源氏物語の植物たち（6）

本吉 總男（もとよし ふさお）　2025 年 4 月

今回は源氏物語の主要な「繪合（えあわせ）」、「松風（まつかぜ）」、「薄雲（うすぐも）」のあらすじを述べます。新たに登場する植物名は少ないのですが、少し工夫してみます。[1]



主な人物

注：二重線は婚姻関係を示す。梅壺女御（うめつぼのにょうご）は前斎宮。

「繪合（えあわせ）」あらすじ

広辞苑によると、「絵合（えあわせ）」とは「物合（ものあわせ）の一種。左右に組を分け、判定者を立て、おのおの絵や絵に和歌を添えたものを出しあって優劣を競う。源氏物語に創作されて以降、平安後期、貴族の間で行われた」のだそうです。

藤壺中宮（ふじつぼのちゅうぐう）の意向に従って、源氏は前斎宮を冷泉帝（れいぜいてい）の嫁にします。このことを知った朱雀院（すざくいん）は、前斎宮を身内のものの嫁にと願っていたので大変悔しく思っています（「澪標（みをつくし）」に、斎宮を自分の身内にめとらせたい気持ちが表現されています）。

[1] 今回からルビを現代仮名遣いに変更します。

しかし朱雀院は前斎宮の入内（中宮や女御が正式に内裏に入ること）の日になって、香壺（薫き物を入れる壺）の箱、薫衣香（いろいろな上等な香を練り合わせた薫物、その他いろいろ極上の品々を前斎宮に賜ります。しかしこれは光源氏へのあてこすりなのです。

その贈り物には、和歌が添えてありました。

> 別れ路に　そへし小櫛を　かごとにて　はるけき中と　神やいさめし
>
> （別れる時、帰ってくるなという意味で小櫛をさしてあげたのを、神はそれを口実に私と前斎宮を隔てたことをいさめたのだろう）

源氏はそれを読んで、朱雀院の無念さを理解します。朱雀院は優しい人なのですが、源氏全盛の時代となり、今は権威もなく、世を恨めしく、今回のことも不愉快に思っておいでだろうと気の毒に思います。源氏は前斎宮に朱雀院への返歌を促します。

> 別るとて　はるかに言ひし　ひとことも　かへりて物は　今ぞ悲しき
>
> （お別れの時おっしゃられた一言も帰ってきた今思うといろいろ思い出されて悲しくなります）

源氏は藤壺中宮の誓約を守り、前斎宮を入内させ、梅壺に住まわせます。以降、前斎宮は梅壺女御と呼ばれます。

ここに、権中納言（もと頭中将）とその娘である弘徽殿女御が登場します。権中納言は弘徽殿大后の妹（四君）と結婚しており、二人の間にできた娘が弘徽殿女御で、冷泉帝の中宮にすることを切に希望しています。権中納言は源氏とは頭中将の頃からの友人ですが、時代は変わって激しく対立する関係になります。梅壺女御と弘徽殿女御は親しい遊び相手なのですが、権中納言は友人関係を断つように、弘徽殿女御を激しく叱りつけます。

冷泉帝は絵に興味を持ち、好むことはいつも絵に描いていました。梅壺女御も趣きのある絵を描くので、冷泉帝は梅壺女御ととりわけ親密になりました。これを知った権中納言は、絵に優れた人たちを呼び集めて、最上の紙に素晴らしい絵を描かせます。

三月（新暦では3月末～4月末）十日頃、節会も済んで内裏の人々は暇な時期なので、絵集めに参加します。源氏は冷泉帝にさまざまな絵を送り、多くの優れた絵があることを知らせま

す。藤壺中宮も内裏にきて、絵にことさら興味を持ち、絵の名手を集めて左右に分け、自らが主催して繪合を行います。左の人々は「竹取物語」に、右の人々は「うつほ物語」の「俊蔭」に合わせた絵を画いて、互いに争います。左の人たちは「なよ竹のかぐや姫」を讃美しますが、「なよ竹」とはどんな竹でしょうか。広辞苑には、「細くしなやかな竹。また、女竹」とあります。「なよ竹のかぐや姫」の「なよ竹」は、どんな竹なのかわかりませんが、広辞苑に従って、メダケについて述べておきます。

メダケとハガワリメダケ

タケの多くは稈の節から生ずる鞘が生長とともにはげ落ちるものが多いのですが、生長後も鞘が稈の節からはげ落ちない竹を通常ササといいます。メダケはササの仲間で、主として地下系で増えて群生します。分布は、本州、四国、九州で日本特産です。

ハガワリメダケはメダケの変種で、葉の長いものと短いものとが混じって生えます。みずき野周辺では見かけませんでした。写真は季節的には若々しく、なよ竹にふさわしいと思い、あえて載せました。

メダケ 2月下旬 取手市市之代

参考：ハガワリメダケ

5月上旬 大船フラワーセンター

右の人々に与えられた「俊蔭」は「うつほ物語」の最初の主人公です。俊蔭は16歳で遣唐使に選ばれましたが、遣唐使船が難破し、波斯国（広辞苑によれば「波斯は中国ではペルシャの古称、日本ではマレー半島地方の古称」）にひとりだけ流れ着きました。観音菩薩に助けてくだされるよう請願すると白馬が現れ、俊蔭を美しい栴檀の林に導きます。そこには3人の住人がいて琴を教えます。その後いろいろあり、30もの琴を得てそのうちから10の琴を持って、39歳で交易の船で日本に帰ります。

ここには「梅檀（せんだん）という植物名が出てきますが、平安時代には梅檀（せんだん）は現在では白檀（びゃくだん）の意味にも使われます。俊蔭（としかげ）が滞在した梅檀（せんだん）の林とは白檀（びゃくだん）の林である思われます。

センダンとビャクダン

今でいうセンダンは、センダン科の落葉高木で、四国、九州、沖縄、東アジアの亜熱帯に分布する植物です。葉や花の美しさから庭や道端によく栽培されています。

センダンの花　5月下旬　守谷市本町地区

センダンの実　12 月中旬　守谷市本町地区

しかし平安時代でいう梅檀（せんだん）は、今でいうビャクダンのことらしいです。ビャクダンは今でいうセンダンとはまったく縁のないビャクダン科の植物です。ビャクダンは純熱帯植物でジャワ島などが原産地です。ビャクダンは半寄生の大木で、心材（しんざい）（幹の中心部）で沈着物により紅、黄、黒褐色などに色づき、香気があり、特に根の材は香気が強く、装飾品の材料や粉末にして練香（ねりこう）などの材料に使われます。

ビャクダンについては「武田薬品工業株式会社　京都薬用植物園　ヒャクダン」が参考になります。さらに詳しくは「京都府立植物園　YouTube　ビャクダン」に興味深い説明があります。

源氏物語「繪合（えあわせ）」に戻ります。藤壺中宮（ふじつぼのちゅうぐう）が主催する繪合（えあわせ）の場に源氏がやってきてたいへん興味をもち、「いっそのこと冷泉帝（れいぜいてい）の御前でこの勝ち負けを決めたらどうか」と提案します。この提案を受けて、その日を定めて左・右に分けた絵が冷泉帝（れいぜいてい）の座所（清涼殿）の御前に置かれます。殿上人（てんじょうびと）は後涼殿（清涼殿の向かいにある）の縁側に、左方と右方に心を寄せる人たちが分かれて座をとります。

前回と同様、左右に分かれて繪合（えあわせ）を競います。藤壺中宮（ふじつぼのちゅうぐう）は左方、権中納言（ごんのちゅうなごん）は右方です。源氏と帥宮（そちのみや）（蛍兵部師宮（ほたるひょうぶそちのみや））も内裏（だいり）に入ります。帥宮（そちのみや）は源氏の勧めで帝の前にて判定役

を仕（つかまつ）ります。左方の絵も右方の絵も優れていて、帥宮（そちのみや）は優劣の判定に困難を極めます。夜になり、最後に源氏が須磨（すま）の詫び住まいで描いた絵が左方で披露され、その趣きに皆も感動し、これによって左方の勝ちとなります。その夜、源氏は故先帝の教訓や思い出や自らの絵心を語り、帥宮（そちのみや）は源氏の才能を讃（たた）え、やがて月も出て、それぞれに楽器を奏し、一夜を朝まで楽しく過ごします。

「繪合（えあわせ）」は権勢を極めた源氏が将来をどのように過ごすのかの悩みで終わります。

「松風（まつかぜ）」のあらすじ

この巻は、明石上（あかしのうえ）が主人公です。源氏は明石上（あかしのうえ）に上京するようにと絶えず催促します。しかし明石上（あかしのうえ）は身分を考えると、都のやんごなき人々にたち混じっていくことはとてもできないと躊躇しています。ただ、姫君（明石君（あかしのきみ））をこのままにしておいていいのかとの悩みは尽きません。そこで明石入道（あかしのにゅうどう）が一計を案じます。

明石入道（あかしのにゅうどう）の妻、明石尼君（あかしのあまぎみ）（明石上（あかしのうえ）の母）の祖父、中務親王（なかつかのさしんのう）が領有していた邸が桂川の上流の大井川（大堰川のこと）付近にあり、継ぐ人がなくて荒れ果てていました。そこを改修して明石上（あかしのうえ）と姫君を住まわせようと思い、そこで宿守している人を呼び寄せ、多くのものを与えて旧邸を修理させます。

入道（にゅうどう）は源氏に、明石上（あかしのうえ）と姫君の住み家とすることを含め、邸の場所を伝えます。源氏は早速惟光（これみつ）（源氏の従者）に当地を見聞させ、惟光（これみつ）は住みやすいようにところどころに手入れをし、「そのあたりは趣があり、明石の海岸にも似通った場所です」と源氏に報告します。

源氏は明石上（あかしのうえ）の心情を知り、ここを明石上（あかしのうえ）や姫君を住まわせる場所にとして、親しい人々を明石上（あかしのうえ）のもとにつかわし、大堰の邸に来るようにと説得します。明石上（あかしのうえ）も決心せざるを得ません。しかし入道（にゅうどう）との別れは双方とも辛いものです。明石上（あかしのうえ）の母君（尼君（あまぎみ））は入道（にゅうどう）とは同じ庵には住まず、明石上（あかしのうえ）を頼りに入道（にゅうどう）とはかけ離れて暮らしているので、今後明石にとどまる気にはなれません。明石上（あかしのうえ）は入道（にゅうどう）と分かれて大堰に行くことを決心しますが、入道（にゅうどう）は明石上（あかしのうえ）に「今日で永遠のお別れです。私が死んでも気になさらずに。それまでは、明石姫のことも、六時の勤め（六時に念仏・誦経（ずきょう）などの勤めなどを行うこと（旺文社全訳古語辞典））にも念じましょう」と最後に伝えます。

源氏は御堂を大覚寺の南に造り、一方、大堰川に面して造られた旧邸の寝殿は松陰にあり、いかにも山里の風情です。源氏は明石上（あかしのうえ）を迎えるために人々を遣わします。明石上（あかしのうえ）は明石で生まれ育ち、当地を離れたことはありません。父との別れ、慣れ親しんだ明石の風景との惜別が悲しくないはずがありません。源氏の心遣いは嬉しいことで、悲喜こもごもあって「その日」を決めます。乳母やお付きのために派遣された女性たちもいっとき住んだ明石を離れることに嬉しさは勝るのですが、未練がないわけではありません。

一行は秋風の吹く決められた日に京に着きました。源氏は安着を知って、家司（けいし）（広辞苑によれば、平安中期以降、親王・内親王・摂関・大臣・三位以上の家の事務を司（つかさど）った職員のこと）に命じて食事などを配慮させますが、自身は大堰に出向く理由を考えあぐね、すぐには動くことができません。日は過ぎて、明石上（あかしのうえ）はつれづれなるままに琴（きん）を弾き、松風が中途半端に響き合います。

源氏は明石上（あかしのうえ）を訪問したいのですが、紫上（むらさきのうえ）になんとか知らせねばなりません。「嵯峨野に建てた御堂を訪（とぶら）い、またその辺りに来ているという明石上（あかしのうえ）が私を待っているというので心苦しいのです。二、三日、桂に行ってこなければなりません」と紫上（むらさきのうえ）に伝えます。紫上（むらさきのうえ）は源氏が「桂の院」という所をにわかに造ると聞いて、そこに女を呼ぶつもりだろうと思い、「二、三日と言うけれどもっと長くあちらに滞在するつもりだろう」と甚だ不愉快に思っています。紫上（むらさきのうえ）は明石上（あかしのうえ）を呼ぶために「桂の院」を造るのだろうと勘違いしているのです。

源氏は大堰の邸を訪ね、ここも遠いので東の院に移らないかと尋ねましたが、明石上（あかしのうえ）は、まだ恥ずかしいからと断ります。一夜いろいろと語らい過ごします。桂の院に集まった家司（けいし）や近くの荘園の人々に大堰の邸を整えさせます。源氏は尼君（あまぎみ）にも会い、尼君（あまぎみ）は源氏が姫君の将来を考えてくれるだろうと期待します。

別の日に大堰邸に行くつもりで出かけると、桂の院に多くの人々が集まっていて、大堰邸にまで殿上人（てんじょうびと）が多く来ています。源氏には、こんな奥まった場所を見つけられるとは体裁が悪く、辛いことです。ともかくも、姫君や明石上（あかしのうえ）に会い、その後は桂の院にて酒宴になります。

紫上（むらさきのうえ）は、源氏が長い間明石上（あかしのうえ）と共にいたと思い、帰宅にもこの上なく不機嫌です。源氏はいろいろ言い訳けし、紫上（むらさきのうえ）に、「明石姫君（あかしのひめぎみ）をそばにおいて養育する気はないか」と尋ね、子供好きの紫上（むらさきのうえ）はやっと機嫌を直します。しかし、一方では明石上（あかしのうえ）を説得するという難題があります。

「松風（まつかぜ）」には松を吹く風の音がこの物語に趣きを伝える役を演じます。尼君（あまぎみ）の歌でも松風が心境を伝えます。

尼君（あまぎみ）の歌。

> 身をかへて　ひとり帰れる　山里に　聞きしに似たる　松風ぞ吹く
>
> （尼となって、夫と別れて一人で帰ってきた山里でも、夫とともに過ごした場所で聞いた松風の音に似ている）

注：山里は大堰川の邸のあるところ。邸は尼君（あまぎみ）の祖父、中務（なかつかさ）の宮のものであり、尼君（あまぎみ）が若かった頃住んでいたところと思われます。そこに、今は身をかえて（尼となって）帰ってきたのです。

源氏が明石上（あかしのうえ）を訪ね、琴（きん）をかき鳴らして詠んだ歌。

> 契りしに　変はらぬことの　調べにて　たえぬこころの　ほどは知りきや
>
> （明石でお別れするとき、弾いた琴の変わらない調べでわかるように、私の心も変わっていないことが分かっていただけるでしょうか）

明石上（あかしのうえ）の返歌は、

> 変はらじと　契りしことを　頼みにて　松にひびきに　音をそへしかな
>
> （心は変わらないとお聞きしたことを頼みにして、松のひびきに琴の音を添えてお待ちしておりました）

マツ

上述のように「松風（まつかぜ）」ではマツやマツを吹く風の音が物語の中にたくみに組み込まれています。そこで、マツについて少し述べておきます。マツは現代では種名（しゅめい）ではありませんが、クロマツとアカマツをマツと総称しています。

クロマツは常緑高木で、高さが35メートルにもなります。幹は黒く、樹皮がはげ落ちると、赤みを帯びます。本州、四国、九州朝鮮半島南部に分布し、海沿いに多く野生しています。アカマツも高さ35メートルに達する常緑高木で、幹の上部は赤褐色で下部は暗褐色です。本州、四国、九州、屋久島、朝鮮半島南部に分布し、クロマツが海岸地底に多く見られるのとは対照的に山地に多く見られます。また、クロマツとアカマツが混在する地帯（守谷も）では、クロマツとアカマツとの雑種、アイグロマツ（アイノコマツ）が生じます。クロマツかアイグロマツかの区別は難しく、私にはできません。

クロマツもアカマツも庭園に植えられて鑑賞されます。また松材として利用したり、特に海岸では防砂林や防風林として、人為的に松林がつくられています。

マツ ２月上旬 守谷市北園森林公園

「薄雲（うすぐも）のあらすじ

「松風（まつかぜ）」に続く物語で、重要な内容が含まれていますが、具体的な植物名は載っていません。内容を簡略に述べておきます。

明石姫君（あかしのひめぎみ）を紫上（むらさきのうえ）の養女にすることについて、明石上（あかしのうえ）は姫君（3～4歳）と別れることに悩みます。しかし源氏や尼君（あまぎみ）の説得や陰陽師に問わせるなどあって、姫君と別れることを決心します。姫君は美しく、紫上（むらさきのうえ）はとりわけ嬉しく、また姫君は紫上（むらさきのうえ）や源氏になつきます。乳母も姫君に付き添います。一方、明石上（あかしのうえ）は尼君（あまぎみ）とともに大堰邸に留まり、やるせない気持ちを捨てきれません。

その頃、葵上（あおいのうえ）の父である太政大臣が亡くなりました。この年は疫病が流行り、天変地異も見られ、源氏は藤壺（ふじつぼ）との密通がこのような事態をもたらしているのではないかと悩みます。

藤壺は春の初めより体調が悪く、三月には病状がきわめて重くなり、冷泉帝も行幸して嘆きます。源氏も心が乱れます。やがて藤壺は燈火が消えるように亡くなります。優しい心をもって、世のため人のため尽くした藤壺の死を誰もが惜しみ、悲しみます。

「薄雲」というタイトルは、源氏の次の歌に由来します。

> 入日さす　峰にたなびく　薄雲は　おもふ袖に　色やまがへる
>
> （入日さす峰にたなびく薄雲の色は私の嘆く心を表す袖の色と区別できない）

次にひとつの大きな出来事が書かれています。冷泉帝は齢70の僧都（老僧）から、実は藤壺入道が中宮であった頃、源氏との密通によって生まれたことを知らされます。僧都は藤壺が中宮の時から長年頼りにしていた祈祷師で、冷泉帝もまた常に心を寄せていました。さらに、この密通を知るものは、自分と王命婦（藤壺入道のそばに仕えていた女官）だけだと告げます。

冷泉帝は母、藤壺入道に加えて。式部卿の親王（次号で述べる朝顔宮の父の死を知り、世の中の騒がしいことに思い悩んでいます。そして、自分の実父が臣下であったことを源氏に告げ、自分が退位して、源氏に帝になってもらうように頼みます。しかし源氏は難く断ります。今後太政大臣になることが約束されていましたが、それも断り、牛車（宣旨を得て建礼門まで牛車で行くこと）のみ許可を得ました。

注：「大命婦」とは皇族で命婦である人のことで、命婦とは、五位以上の女官（内命婦）、または五位以上の官人の妻（外命婦）のこと。

冷泉帝の後宮のひとりに前斎宮の梅壺女御がいます。女御が里（二条院）に戻った時、源氏が面会します。源氏は女御に恋愛していますが、お互いに立場上、恋愛がそれ以上に進むことはありません。結局、春が好きか秋が好きかという問答で終わります。その後、源氏は大堰邸に明石上を久しぶりに訪問します。

今回は植物の写真が少ないので、紫式部に名を借りた植物、ムラサキシキブの写真を載せておきます。

ムラサキシキブの花
6 月下旬　守谷市本町地区

ムラサキシキブの実
10 月下旬　守谷市本町地区

ムラサキシキブの実と紅葉
11月下旬　守谷市本町地区

ムラサキシキブは高さ3メートルほどのシソ科の落葉低木です。秋に色づく紫色の実が美しいので、ムラサキシキブと名付けられました。北海道、本州以西の日本列島と東アジアの温帯から亜熱帯まで分布しています。